行政のあり方を理論・実践から追究

法・外山公美　教授

学生は外山教授の授業に大いに刺激を受けるそうだ。「理論ばかりでなく実務を、というのが私のポリシー。3年前のカリキュラム改正で授業に自治体や国の行政機関でのインターンシップを導入した。東京23特別区や総務省などと提携して、学生に2週間ほど行政実習をさせる。行政は暮らしそのものですから」

大学は学と実務の交流の場で、行政は官だけでなく民の概念を取り入れるべき―が持論である。

北米の地方行政管理を専門にしている。20年前の大学院生時代に地方自治の実験室といわれ多種多様な制度がある北米（米国）に留学したのを機に日本に取り入れられる制度を研究してきた。「オンブズマン制度」と「シティ・マネージャー制度」などがそれだ。

カナダ・バンクーバー市のロジャー支配人（左）を訪問（2007年）

「オンブズマン」は日本で活発な民間のオンブズマンではなく、川崎市などが採用している「公的オンブズマン」である。国や自治体自身が議会や首長の任命でオンブズマンを置き、行政上の苦情などを一元化する仕組み。日本の自治体だと、議員が市民の苦情の窓口になる場合が多いが、本来の仕事ではないはずだ。公明正大なプロセスを確保する上でも重要な制度である。教授はオンブズマンの国際的組織である「国際オンブズマン協会（IOI）」の会員でもあり、日本オンブズマン学会の設立にも寄与した。

市政に支配人制度

「シティ・マネージャー（支配人）制度」は、米国やカナダでは20世紀初頭から導入された伝統ある制度。支配人が市長に代わって行政全般を司るもので、行政上の権限を委ねられている。支配人は大学院で行政学修士などの学位を取り、何年か支配人補佐官を経験するのが一般的である。

ほとんどの北米の中小都市が採用しており、「国際都市管理協会（ICMA）」が仲介役となり、全米あるいは全世界に広く支配人を募集している。外山教授もこの協会の会員である。日本では、地方自治法の制約があり導入は難しい。それでも最近は、議員定数の見直しや議員のパートタイマー制が議論されるなど、地方分権に地方自らが立ち上がって制度改革を進める動きが出てきており、教授の研究が生かされる局面になってきた。

進展する地方分権に対応

管理行政学科が公共政策学科に

「公務員の日大」へ好機到来

外山ゼミの入室条件は「公務員志望者」に限られる。ゼミ案内にも明記してあり、発足以来15年間変わっていない。

「本学には多くの学生が地方から来ているが、彼らに地方の担い手になってもらいたい。また、国家公務員つまり国の仕事を担う人材も育てたい。私の専攻分野に近いし、それなら公務員養成ゼミにした方が学生にとっても切磋琢磨できていい」。また、公務員になってから役立つように政策提言学生フォーラムに積極的にゼミ生を参加させている。登別のフォーラムでは優秀賞を獲得した。

ゼミの学生たちと語り合う外山教授

行政職課程を新設

教授は日本大学本部の「公務員試験支援センター」の運営委員で、企画・広報専門委員長を務める。本学卒業生には公務員が多い。「行政・公務員の日大」へ新しい挑戦を始めている。

法学部に新しい学科が誕生する。「管理行政学科」が平成21年度から「公共政策学科」になり、公務員志望者のための「行政職課程」が新設される予定である。今、公務員はモラル低下など多くの問題が噴出している。

「逆風が吹いているのになぜ?と思われるかもしれないが、逆風を追い風にしたい。最近では公務員離れを心配する声が多い。しかし、公務員になりたいと思い一途に勉強する人には好機になるし、そういう人が増えればモラルも上がる。多くの公務員を育てるのが私の夢です。日大中学からお世話になった日大への恩返しにもなる」。新学科の広報活動のため高校回りする日がやってくる。

プロフィル

外山　公美（とやま・きみよし）昭和57年法学部卒業、大学院法学研究科博士後期課程中退。この間、本学海外派遣奨学生としてカンブズマン学会理事のリフォルニア大バークレー校に留学。(財)行政管理研究センター研究員、法学部専任講師、助教授、カナダ・ビクトリア大客員研究員を経て、平成15年教授。日本法政学会・日本オ他、日本政治学会、日本行政学会などに所属。横浜市出身。48歳。

ジェンダー規範の成立過程を研究

文理・小平麻衣子　教授

この2月に「女が女を演じる　文学・欲望・消費」（新曜社）を出版した。日本経済新聞などに書評が取り上げられた、330ページの労作。同書の目次から「章」のタイトルの一部を拾ってみると―

「「けれど貴女！　文学を捨ては為ないでせうね」―『女子文壇』愛読諸嬢と欲望するその姉たち」＝第四章、「〈一葉〉という抑圧装置―ポルノグラフィックな文壇アイドルとの攻防」＝第五章…など刺激的な言葉が並ぶ。さらに、「節」の見出しも、「誘う女／買わない男―デパート小説群と『三四郎』」、「〈女〉は再演されるに過ぎない」…こちらも相当挑発的だ。

研究室で資料を手にする小平教授

実はこの本、日本近代文学が専門の小平麻衣子教授が研究テーマとしている「近代小説とジェンダー」の成果をまとめたもの。近代メディアが発達し、文学の分野が確立した明治から大正前期までの文学作品をメーンに、婦人雑誌、百貨店のPR誌、化粧やおしゃれを勧める新聞広告、演劇などを通してジェンダー規範（男らしさ・女らしさ）の成立過程を研究している。かみくだいていえば、女性の読み書き能力が高まったこの時期に、女性は社会にどのように承認されていたのか、小説などを通じて分析する。

明治～大正文学など分析

「落とし穴」をあぶりだす

一葉と須磨子は?

そうした観点から見ると、樋口一葉（明治5年3月―29年11月）も存命中は、「女性作家の代表」に格上げされたのだという。

また、大正前期の新劇女優、松井須磨子（明治18年3月―大正8年1月）が突出した人気を集めた理由について、芝居の素人というイメージを持っていたことが重要と指摘する。須磨子は坪内逍遥の主宰する文芸協会の女優。歌舞伎経験者や芸者出身の女優と異なり、須磨子が女学校出の素人であったために社会に許容されたと分析する。女性タレントに初々しさや素人っぽさを多く求める現代の状況の先駆けだ。

学生たちと談笑する小平教授

このように、一見女性の活躍が認められているようでいながら一定の枠の中に囲い込んでいく社会構造の解明を試みる。「現代の性別による不平等は、それほど単純ではありません。昔より活躍の場があり、楽しみもあることで、かえって社会のジェンダー構造に取り込まれていることに各自が気づきにくい、という落とし穴があります。もっと自由に生きられるのに、自ら行動の幅を狭めてしまうのは惜しい。過去の分析はそこから抜け出すヒントになります」。

学生時代の疑問が契機

この研究を始めたきっかけは学生時代に抱いた疑問。文学部は女子学生も多く、女性的なイメージもあるのに、プロの領域である教授や大学院生は男性ばかり。イメージと実際の落差に興味を持った。当時はすでに男女雇用機会均等法施行後で、〈女性の時代〉などと言われていたが、一人歩きするイメージに振り回されていただけではないか、と振り返る。

職場での「女性の視点からの意見を」とか「女性ならではの企画を」という発言も落とし穴の例。「期待されているのは確かだが、個性ではなく、気配りや主婦目線などの役割が要求されているわけで、実は微妙」と小平教授。こうした現実のとらえ方は、ストーリーというわかりやすい形式を得て、人々に浸透していく。特に文学を分析する理由でもある。

プロフィル

小平　麻衣子（おだいら・まいこ）平成2年慶應義塾大学文学部卒。9年同大学大学院文学研究科博士課程（国文学専攻）単位取得退学。埼玉大学助教を経て、14年日本大学文理学部助教授、1940年教授。日本近代文学会、日本文学協会などに所属。著書に「書いて考えるジェンダー・スタディーズ」（共著、新水社）など。博士（文学）。専門は日本近代文学。東京都出身。